

自閉症者の青年期以降における社会性の発達

川瀬 泰 治

はじめに

大人になった自閉症者はどのような生活をしているのか、特に人との関わりに困難をもつといわれる自閉症者では青年期以降の対人関係の発達はみられるのか、また発達するとすればどのような経過をたどるのか。とくに、青年期に強度行動障害といわれるような著しい不適応行動をみせていた自閉症者は、その後環境への適応を果たしていくものだろうか。本研究はこのような問題意識をもって、青年期以降の自閉症者が入所施設で送る日常生活の実態に対して、質的研究という方法によるアプローチを試みようとするものである。研究の動機には筆者のきわめて個人的な事情がからんでいるので、まずそれについて述べたい。

筆者と家族はここ数年、第二子長男Kの「強度行動障害」に悩まされてきた。Kについては、以前事例研究（川瀬二〇〇〇）として報告したことがあるが、その後、年齢でいえば青年期に差しかかる頃から激しい「こだわり」がみられるようになった。それは市内の焼き肉レストランとファミリーレストランといくつかのお菓子屋さんを決まった順序で巡り、食べ歩くというものである。途中で満腹になると吐き戻しながらもコースを完遂しようという強い意欲がみられることもあったので、この食べ歩きは単なる食欲にかられてのことではなく、定型的なパターンへのこだわりという性質が強く感じられるもの

である。たいていは父親や母親に運転させて車で巡回するのだが、父親が車で出かけていて留守の時には徒歩でも母親を引き連れて行く。このこだわりを阻止しようとするたいへんなパニックとなり、自分の手を噛むという自傷や周りのものを殴る蹴るといった他傷やものをあたりかまわず投げつけるという暴力行為におよぶ。一番困ったのは、車で走っているときに少しでも目的の方向と違ったりすると、ハンドルを力づくで操作しようとするのである。走っている最中に反対車線に車を進めようとするので、道路の真ん中で急停車しもしみ合いになるということも度々であった。

このこだわりは養護学校高等部の時期から始まった。初めの頃は親が制止すれば我慢してあきらめることも多かったが、高等部を卒業した頃から次第に激しくなってきた。卒業後は週五日デイサービスと、時々週末のショートステイに通う生活になったが、帰宅するやいなや食べ歩きに出かけようとした。それら施設にいる間は、本人にとって食べ歩きを我慢させられるだけの場所や時間にすぎないという感があり、全般的に不穏であることが多かったようである。成長につれて力も強くなり、こだわりを制止することがだんだん難しくなり、二〇歳になった時には体重が一〇〇kgを超え、糖尿病を発病してしまった。デイサービスやショートステイでも問題を起こすことが多くなり、精神科で向精神薬を処方してもらったが、一進一退を繰り返して、それら施設での生活も困難になってきた。そして糖尿病の治療も兼ね

表1 強度行動障害判定基準表 (厚生労働省)

行動障害の内容	1 点	3 点	5 点
1 ひどい自傷	週に1・2回	一日1・2回	一日中
2 強い他傷	月に1・2回	週に1・2回	一日何度も
3 激しいこだわり	週に1・2回	一日1・2回	一日何度も
4 激しい物壊し	月に1・2回	週に1・2回	一日何度も
5 睡眠の大きな乱れ	月に1・2回	週に1・2回	ほぼ毎日
6 食事関係の強い障害	週に1・2回	ほぼ毎日	ほぼ毎食
7 排泄関係の強い障害	月に1・2回	週に1・2回	ほぼ毎日
8 著しい多動	月に1・2回	週に1・2回	ほぼ毎日
9 著しい騒がしさ	ほぼ毎日	一日中	絶え間なく
10 パニックがひどく指導困難			あれば
11 粗暴で恐怖感を与え指導困難			あれば

上記基準によってチェックした結果、家庭にあって通常の育て方をし、かなりの養育努力があっても、過去半年以上様々な強度の行動障害が継続している場合、一〇点以上を強度行動障害とし、二〇点以上を特別処遇の対象とする。

て精神科に三ヶ月ほど入院した。しかし、治療が奏効し退院しても、間もなく悪化して再入院となり、その後、入退院を繰り返しながら今日に至っている。

以上のように、Kの状態は厚生労働省のいう「特別処遇を必要とする強度行動障害」の典型的なケースに該当するであろう。厚生労働省が平成一〇年に設定した判定基準(表1参照)では二〇点以上が特別処遇の必要な強度行動障害となるが、Kの場合は1、2、3、4、10、11などが該当し、いずれの項目もほぼ毎日みられ、さらに頻度の低い項目も加えれば二〇点はゆうに越える。

このような暗澹たる日々のなかで、一条の光が差し込んだかなのような体験をした。それは、めぶき園という知的障害者更生施設に、父子で土・日にかけて一泊二日のショートステイをした時のことである。

めぶき園は、近くの施設でのショートステイがでなくなつて以来、唯一受け入れてくれる施設であり、それまでも何度かKを単独でショートステイさせてもらっていた。めぶき園は、創設以来一五年以上にわたって自閉症の療育に専門的に取り組んでいるので、かねてより関心をもっていたが、なかなか見学する機会がなかった。ショートステイの送迎の折りにでも見学したいと思つたが、Kは車を見るとすぐ乗り込んで発進を急かすので、ゆっくり見学する余裕はなかったのである。何度めかのショートステイの時に、ふと思いついて父子でのショートステイを申し込んだところ、快く受け入れていただいた。

ショートステイ初日の土曜日の昼頃、自家用車で両親と二歳年上のKの姉とK本人の四人でめぶき園に向けて出発した。途中で何度も運転を妨害しようとするのを運転手以外の二人が左右から制止しながらやっとたどり着くことができた。Kは意外にもすんなりと車から降りて建物の中に入った。ところが応接室で手続きをしている間に園長先生に殴りかかったり、母親の手を引いて外に出ようとしたりと不穏な状態となった。しかし、母親と姉が車で立ち去ると、帰ることをあきらめたのかやや落ち着き、まもなく昼食の時間となった。

食堂ホールが改装工事だったので、廊下にずらつと椅子とテーブルを並べて壁に向かって食事をとるといふ変則的な昼食であった。初めは五、六人の利用者が周りにいたが、Kと並んで食べ始めると、それまで居室にいた二〇人ほどの利用者が三々五々に集まってきた。食べ始めた。食べ終わるとまた居室に戻つたり、玄関ホールのあたりで新聞を読んだりコーヒーを飲んだりしていた。その時まず驚いたのは、その場がたいへん静かであるということだった。確かに常同行動的な音声や行動を示す利用者はいたが、それにもかかわらず静かであると

いう印象を受けた。静かさの原因としては、第一に自閉症者に特有な社会的交わりの乏しさによって、お互いにほとんどやりとりをしないということがあったであろう。しかしそれ以上に、各々の行動が全体として統制がとれており、秩序だっていることが大きかったように思える。その場に職員は一人か二人いたが、号令をかけたたり指示をすることもなく、利用者は各自が自分のペースで自主的に事を運んでいた。このように自由な状況下で、自閉症の人たちが自主的に粛々と行動できることが驚きであった。

強度行動障害を改善する確かな方法があるのか、あるいは青年期を過ぎれば落ち着くのか、それとも元々障害の程度が軽かったのか、などと思いをめぐらしながら職員にその点を質問してみた。すると、職員の話では、利用者がまだ若い頃には行動障害がひどい人が多くて苦労をした、Kと同等かそれ以上の行動障害ぶりをみせていた人もいた、しかしめぶき園での生活を通してほとんどの利用者が改善してきた、とのことであった。後に文献を調べてみると、確かに平成一〇年にめぶき園における利用者数名の強度行動障害の実態が報告されており、さらに改善の取り組みも報告されていた(五十嵐一九九八)。これらのことは、Kの将来に対する不安をかなり軽減してくれるものであった。

この父子ショートステイの折りに、強く印象に残ることがもうひとつあった。めぶき園では週末は基本的には自宅で過ごすという方針なので、昼食後は次々と保護者が迎えに来て利用者は各家庭へと帰って行った。その日は家庭の都合でお迎えのない人が五、六人残ることになった。残った人たちは居室に戻ったり玄関ホールの椅子に腰を下ろしたりしていた。すっかり寂しくなったが、Kはずいぶん落ち着いていた様子になってきた。彼らははじめは筆者やKに対してまったく関心がないようにみえたが、そのうち彼らの方から積極的な関わりがあったのである。筆者とKが玄関ホールで横に並んでテーブルについてい

て、筆者はテーブルの上に本を置いて読み、Kは隣で本をぱらぱらとめくりながら紙のにおいをかいだりしている時であった。ひとりの利用者が玄関ホールに来て我々の後で行ったり来たりしていた。初めは五mぐらい離れた場所にいるので、我々とは関係なく常同行動的なルーティンとして玄関ホールにやってきたのかと思っていた。ところがそのうち、Kのうしろにすっと近寄りKの右側の頬にそっと指で触れてすぐ立ち去り、居室の方に戻っていったのである。Kはというと、何事もなかったかのように本のぱらぱらめくりを続けている。

相手の頬に指で軽くそっと触れるという行動はKにもみられる行動である。Kの場合は母親やデイサービスの女性職員などに対してよく行っている。しかし、他の人からされるというのは初めてではないだろうか。Kが相手の頬に触れるときは、穏やかでにこにここと笑顔をたたえながらのことが多く、相手に対して親愛の情を持っていることが伺われる。Kと同じようなことをする人が他にもいたのかという親近感と、その接触の仕方にKと同様の友好的なものを感じてほのぼのとした感慨を持った。さらに驚いたことに、それからしばらくすると今度は別の利用者がやってきて、ほとんど同様な仕方でKの頬に触れていったのである。

浜田(二〇〇三a)は、自閉症というのはひとつの文化であるという。一般的に、文化とは「人間社会における歴史的に異なった慣習的な機能の集合体」(山崎他一九七〇)だと規定されている。同じ文化に属するもの同士はその慣習を共有し、お互いに意識することもなくその慣習に沿った行動を交わしながらうまく社会生活を機能させている。たとえば挨拶の仕方などは文化によってかなり異なる。日本人同士なら、お互いの親密さの度合いや相手との関係、またどれぐらい長く離れていたかなどによって挨拶の仕方を微妙に変える。この微妙な違いを使い分けることは日本人であれば当たり前のことであるが、社会生活を営むうえでたいへん重要なものでもある。しかしその文化の

外にあるものにとつて、それは感知しにくくて理解しがたいものである。Kと二人の利用者のあいだに交わされた頬タッチは、我々からは見えにくい彼ら同士の間にはひそやかなコミュニケーションがあることを垣間見せるもののように思えた。お互いに距離をとり、視線を合わせることもなくめいめいに背を向けたりしているようにみえるが、彼らなりの交流の仕方がひとつの文化としてあるのではないかと思われる。浜田がいうように、それは我々の文化とは慣習の異なるひとつの異文化といえるものではないだろうか。そして文化人類学者が文化の異なる民族の中に入つて行き、共に生活することによって、その文化を内側から理解する方法としてエスノグラフィーを考え出したように、自閉症を異文化としてとらえ、エスノグラフィーによる異文化理解としての自閉症理解が必要なのではないだろうか。

めぶき園での利用者の生活に触れてこのようなことを考えていたのだが、この時の体験はあまりにも短期間であつたし観察した利用者の数も少なかった。また、著者自身が自閉症者の親であることから、将来に対する希望を見いだしたいという潜在的な傾向によつて現実を歪めて見ることがなかつたとはいえない。ショートステイで見られた数人の利用者の適応的で主体的な行動は一般的なものかどうか、また、果たして自閉症者の文化とはどのようなものか、また彼ら同士で作る慣習の体系といったものがあるのかどうか、さらに青年期以降の社会的文化的発達はいかなるものか、等々といった素朴で漠然とした疑問にかられて、とりあえず自閉症者の生活の場に入つてみたいというのが本研究の目的ということになる。

めぶき園での観察

このような曖昧な研究目的であつたが、めぶき園に観察をお願いをしたところ快く受け入れていただいた。めぶき園は、大分市の二〇km

ほど南にある犬飼町の小高い丘の上に、平成三年に創設された知的障害者入所施設である。定員は三〇名で二七～三六歳の利用者がいるが、そのうち二五名が自閉症あるいは自閉的傾向のある知的障害者である(五十嵐一九九八)。これに数名のショートステイのメンバーが加わり、表2の日課に参加している。めぶき園では家庭との絆を重んじるという理念に則つて週末帰宅を行っている。

観察の対象は、主として入所者とショートステイ利用者のなかでも自閉的な特徴をもつ三二名であつた。観察は六月五日から九月三日の期間中に、週に一回から二回のペースで合計一六回行った。観察の曜日では木曜日がもっとも多く一回であつた。火曜日が二回、月曜日、水曜日、金曜日がそれぞれ一回であつた。観察の開始時刻は一日からと午後一時からがほぼ半数ずつであつた。観察の終了時刻は約五時までとした。余暇活動を観察するために午後九時に終了したこともある。観察時間の合計は、約八七時間であつた。観察するシーンは午前中の生産活動と午後のクラブ活動の日課、そしてその合間にある自由時間であつた。

日課の観察(非参与的観察)

決められた課題に対して適応的に行動できるかどうか、また活動に主体的に取り組むことができるかどうかをみるために、日課の活動を観察した。ここでは、日課活動の邪魔にならないように、利用者から距離をとり全体が見渡せるような位置から、非参与的に観察を行った。

生産活動は四種類の課に分かれており、農園芸課に六名、陶芸課に九名、商品受注課に一〇名、外勤課に五名が配属されている。担当職員は各課二～三名ずつ割り当てられている。課のメンバーは入所者については固定しているが、ショートステイのメンバーは日によって若干の入れ代わりがある。生産活動の場所は、園の敷地内にある作業

棟と車で一〇分ほどの場所にある五〇〇坪の畑である。外勤課は外部のリネン会社に通勤している。課ごとの観察回数は、陶芸課が五回、商品受注課が三回、農園芸課が五回であった。外勤課は観察の対象にできなかった。

クラブ活動は五種類あり、スポーツクラブに九名、美術クラブに一〇名、音楽クラブに一〇名、散歩クラブに六名、日舞クラブに二名が配属されている。担当職員は各クラブ二〜三名が割り当てられている。クラブ活動のメンバーも入所者についてはほぼ固定しており、ショートステイのメンバーが適宜配置されるが、生産活動と比べるとその日の利用者の希望に応じて変更されることが多いようである。クラブ活動の場所は、美術クラブが園の食堂ホール、音楽クラブと日舞クラブが別棟の屋内ホール、スポーツクラブと散歩クラブが犬飼町の体育館やグラウンドと近くのダムの周遊路などである。観察回数は美術五回、音楽二回、スポーツ三回、散歩一回、であった。散歩クラブは分散して他の三つに加わることが多かった。また日舞クラブは観察日に実施されることはなかったため観察はできなかった。

そのほかに、療育活動を二回、余暇活動を一回観察した。療育活動は一回目が大分市内の屋内プールで水泳するのに随行した。参加者は八名と担当職員二名であった。二回目は雨天のため犬飼町の体育館でのランニングとストレッチ体操に随行した。ランニングのメンバーは一五名、ストレッチ体操のメンバーは四名であり、担当職員は各二名ずつであった。筆者は水泳とランニングの様子を観察したり、ストレッチの補助をした。余暇活動はカラオケに参加した。カラオケは食後のリラククスした楽しい雰囲気のある場であり、参加者は出入りがあって確かではないが、二〇名ぐらいがいた。ここでは筆者もかなり利用者と一緒に働きかけ、一緒にダンスをしたり音楽に合わせてみんなでホールの中を走ったりした。

自由時間の観察（参与的観察）

利用者の対人的な関わりをみるために、自由時間を利用して参与的観察を行った。この観察では、主として筆者と利用者との関わりに注目したが、利用者どうしの関わり、利用者との関わりにも目を向けるようにした。

午前中の生産活動が始まる前の三〇分間、昼食が終わって午後の活動が始まるまでの一時間、午後の活動が終わって夕食までの一〜二時間間、利用者は居室や食堂ホール、玄関ホールのあたりで自由に過ごしている。図1に示すように、食堂ホールには五人掛けのテーブルが八個（Ⅰ〜Ⅷ）あり、テーブルの周りには五脚ずつ椅子があり数字のように配置されている。壁際には六個の背の低い椅子（Ⅰ〜Ⅵ）が置いてある。また食堂ホールにはテレビが置いてあり、利用者がスイッチを操作して自由に見られる。また新聞も六部ほどラックに架けてあり自由に見られるようになっていた。利用者は居室にいないときは食堂ホールに集まってテレビをみたり新聞を読んだりして過ごすことが多い。参与的観察は、主としてこの食堂ホールにおいて行った。ほとんどの利用者は、筆者からの積極的な関わりに対して多少なりとも緊張が高まるように思われたので、特に初期は状態をみながら細心の注意を払いながら参与的観察を行った。

表2 めぶき園の日課表

時間	日 課
7時	起床、更衣、洗面、布団上げ、検温
8時	朝食、与薬、歯磨、食堂清掃
10時	午前生産活動開始（各課毎にミーティング） （全体行事のときは全体ミーティング）
11時15分	午前生産活動終了
12時	昼食、与薬、歯磨、食堂清掃、自由時間
13時30分	午後生産活動開始 （火曜日は療育活動、木曜日はクラブ活動）
15時30分	午後生産活動終了、ランニング等
15時45分	お茶の活動
16時	入浴（前半）、自由時間
18時	夕食、与薬、歯磨、食堂清掃
18時40分	入浴（後半） 余暇活動（詩吟、ハンドベル、和太鼓、カラオケ、ビデオ） 自由時間（金曜日はコーヒータイム）
20時30分	与薬、学習（日記、書取、ドリル、小遣い帳記入等）
21時30分	就寝準備
22時	就寝

結果と考察

日課活動について

生産活動、クラブ活動、療育活動の開始時には、時間がくるとほとんどの利用者が自発的に玄関ホール周辺に集まってくる。中には職員に声をかけられてはじめて動き出す人や、居室で休憩中に眠ってしまった

う人もいるが、職員が声をかければ問題なく玄関にやってくる。小林のケース報告(二〇〇一)によれば、自閉症者では行動の開始がスムーズにいかない人が少なくないようだが、めぶき園ではこれら活動開始にあたって職員と利用者の間での葛藤は見られなかった。車で出発するような場合には、かなり待たされる時もあったが、そういう場合にはどの職員も無理強いするのではなく、本人がその気になるまで待つという姿勢が感じられた。また待たされる利用者の方も不穏になつたり混乱するようなこともなかった。

活動の初めにはミーティングがもたれ、その日の活動内容や目標、注意点などについて担当職員から口頭で提示される。ミーティングの間中、よそ見をしたり常同行動をしていて一見話を聞いていないようにみえても、実際に活動が始まるとちゃんと指示が通っていることが多かった。眠たそうにしたり退屈したりやる気がない人も時にはみられ、活動を中断して常同行動にふけつたり机に俯してしまう場合もあったが、職員はしばらく様子を見るという対応の仕方が一般的のようである。長く続く場合には声をかける時もあるが、無理強いという要素はない。「オシマイ」「ヤメル」などと活動を終わりたいという要求を訴えたりするが、職員がもう少し頑張ろうと声をかけてやると活動に戻ることが多い。

これらの活動の終了時は、職員による「終わります」の合図によってほとんど遅滞なく終了することができる。当初の目標に達していてもまたその活動が特に好きな場合でもすんなりと中断して終わることが出来る。たとえば療育活動のひとつとしてプールでの水泳があったが、担当職員の話によればほとんどの利用者は水泳が大好きであり、しかもその日はたいへん暑い日だったので、終了させるのはかなり難しいのではないかと予想していたが、実際には何の混乱もなく四五分ほどの水泳の後合図一回で全員がプールから出てシャワー室に向かった。

まず全体的な印象からいえば、父子でのショートステイの時に感じた利用者の統制のとれた主体的行動は、日常生活全体を通して一貫して感じられた。観察期間を通してすべての利用者が日課にもれなく参加しており、活動を拒否して居室に留まる人や活動の途中で脱走する人は皆無であった。しかも、担当職員が強く指示したり統制する必要もなく、利用者は自主的に活動を開始し、終了し、次の活動に切り替えていた。

以上のような日課活動における適応的な行動は、環境の構造化によるところが大きいと思われる。日課のタイム・スケジュールはシンプルでかなり固定されており、ほとんどの利用者は個々の日課の順序や持続時間について習慣化されたパターンを作りあげているようにみえた。このような時間的な構造化によって活動の切り替えがスムーズに行われていたと思われる。また能力や適性、本人の希望に応じて課題を個別化し、つねに全員がなんらかの課題に取り組めるようにしている。課題の提示を分かりやすくするためのさまざまな工夫もみられる。たとえば農園芸課では、雑草を取る範囲を指定するための輪を用意してあるが、能力に応じて大きさを変えてあるし、また空き缶つぶしでは作業の量があらかじめ分かるようにストック用の籠の大きさを個別に用意してある。

ところで、めぶき園での構造化の考え方はTEACCH(ノースカロライナ大の自閉症療育プログラム)のものとかかなり異なるように思える。TEACCHでは、自閉症者を個々にブースで区切って、写真や絵カードによって課題を提示するというように、対人的な関わりを排除して物理的な次元で構造化を行おうとするが、めぶき園ではむしろ対人的な関わりを積極的に取り入れた構造化が目指されている。たとえば、日課の前のミーティングで担当職員が口頭で課題を提示するとか、生産活動は大きなテーブルを全員で囲んでお互いにやりとりしながら作業をするなどにその特徴が現れている。それはTEACCH

的な観点からいえばあまり構造化されていない環境ということになるであろう。しかし、それにもかかわらず利用者が適応的な行動を示すというところが重要な点ではないだろうか。自閉症者は社会的関わりが苦手だといわれているが、実際には着席行動や課題遂行に当たって、利用者どうしの社会的促進がかなりあるのではないかと感じられた。オリヴァー・サックス(一九九二)は、自閉症の療育に関して、形式的なトレーニングも必要だが、それより親密で心のかよいあった関係が重要だという提言をしている。めぶき園の基本理念はこの考え

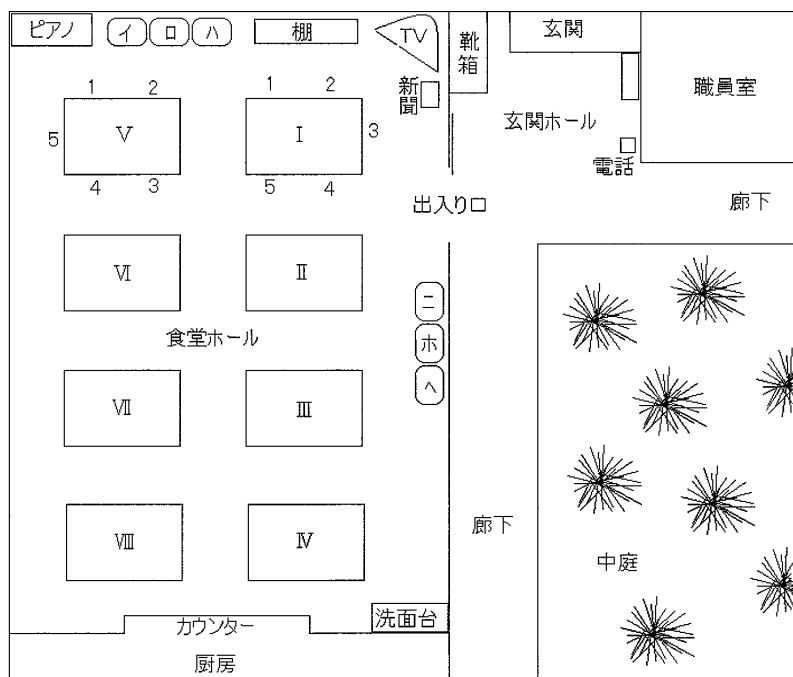


図1 食堂ホールと周辺の配置

に近いものといえよう。厚生労働省が行っている強度行動障害の特別処遇の実施に際しては是非参考にしてほしいところである。

利用者のなかには「常同的で反復的な衝動運動」(DSM-IVによる自閉性障害の診断基準のひとつ)をするものが多いが、それらはめぶき園では基本的に受容されており、日課の最中にも思いつくような運動を(楽しみながら)行っている。ただ、大きな声や他に迷惑となるような行為は職員によって断固として制止されていた(これも対人的な関わりを通じての構造化の例と言えよう)。ときどき不穏になつたりパニックに近い行動も数人にみられたが、観察期間を通して全員のを合計しても六、七回とかなり稀なことであつた。そのような問題行動は二〇歳前後のショートステイの利用者に多かつた。そしていったん起きた混乱も他に波及することなく、職員の機敏で適切な対応によつて、たいていはまもなくおさまつていた。きわめて秩序だつた穏やかな日常生活が送られているといえる。何人かの職員から得た情報と筆者が観察した限りでは、表1の基準で一〇点を越える強度行動障害に該当する利用者はいなかつた。

自由時間における参与的観察

利用者の対人的関わりの仕方や発達を検討したいという当初の目的からすれば、今回の観察期間は質量ともに不十分であろう。したがつてこのテーマに関しては予備調査的な段階としたい。

さて、「参与しながらの観察」Participant observationという場合、「参与」participationと「観察」observationという本来二律背反的な事態をどのように適切に関連させていくかが問題となる。対象をよく見ようとすれば距離をとらなければならないが、そうすると対象との関わりは失われる。逆に対象と深く関わろうとすれば見ることができなくなる。確かにこの二律背反は避けられないが、しかし逆に、「参与なき十分な観察はありえない」ともいえるのではないだろうか。

相手との関係に入り込み深く関わることによつて新たに見えてくるものがある。そのような観察は関わりをさらに深めるものであり、深められた関わりはさらに深い観察をもたらすはずである。この問題は、参与と観察の関係を二律背反的なものから、このような相互作用的なものへと進展させていくにはどうするかという課題として捉えるべきであろう。これに関連するものとして、麻生(一九九二)の「現象を捉える視点」が参考になる。その要点を取り出せば次のようになる。

あるコミュニケーションの系があるとすると、系には必ず内部と外部がある。そのコミュニケーションの系について外部の視点からしか見えないものと、内部の視点からしか見えないものがある。この両者の関係は相補的である。一般に、そのコミュニケーションの系の内部に入らなければ、その系でなされているコミュニケーションの意味は了解できない。そこで外部の視点を持ちつつ徹底的に系の内部にとどまり、そこから観察するという特殊な態度が求められる。それはヨーロッパの探検家が未開社会を訪れたとき、その住民であり情報提供者でもあるインフォーマントが示す態度と同じものである。インフォーマントとは系の内部に存在しつつ外部の視点を半ば身につけつつある境界人である。麻生は、このインフォーマントのスタンスが参与しながらの観察の視点としてふさわしいのではないかという。

そこで筆者の第一の目標は、めぶき園でのコミュニケーションの系の内部に入ることとした。そのためにはまず積極的に関わっていかねばならない。まず初日の出会いの様子をフィールドノートから拾い出してみよう。観察のためにはじめてめぶき園を訪問したのは、六月中旬木曜日の午後であつた。エピソード中の記号は図1中の記号を示す。

△エピソード1V

すでにクラブ活動が始まっており、食堂ホールでの美術クラブの様子を途中から観察しはじめた。テーブルIとVをつなげて、その周りを取り囲んで一〇人の利用者が三人の職員にサポートされてモザイクタイルの貼り絵を制作中であった。筆者は初めはやや遠くから全体の様子を見ることにした。利用者は静かに黙々とタイル貼りをしている、誰も筆者を気にとめている様子がない。筆者に気づいていないのではないかと思うぐらいにこちらに視線を向けない。少し近づいてみると、誰かが制作中のタイル画を見て回った。ある利用者がV-1にいて、その絵を後から肩越しに見ているときに、左側前方から視線を感じたのでそちらを向くと、I-4にいるAと目が合ったが、その瞬間にあらさまに目をそらした。筆者に関心をもっているようなのでテーブルを回り近寄ってみると、見るからに緊張が高まり、目が上ずって左右に細かく動き小さくうなり声のような声を出し始めたのですぐ離れた。

△エピソード2V

クラブ活動が終わり、食堂ホールには利用者が三人いて、歩き回ったり椅子に座ったりしている。筆者が食堂ホールの入り口あたりに立って彼らを見るとき、Bが玄関ホールの端から端までを行ったり来たりしている。筆者は背を向けたままで食堂ホールの中を見ていた。しばらくして後ろから筆者に近づき、脇腹にそっと軽くタッチして行った。Bはさっきの美術クラブの時は筆者にまったく関心を示さなかった。筆者はこれを友好的な挨拶と感じ嬉しくなったので、お返しに何か言おうと近づこうとすると足早に廊下の奥の方に逃げ去ってしまった。

自閉症者の特徴のひとつとして視線回避がある。エピソード1は初

日にみられた典型的な視線回避の例である。その日の三時過ぎに、クラブ活動が終わって全員が食堂ホールに集まったが、その時もほとんどの利用者はこちらを見ないので、まったく気づかれないような気持ちになったが、ちょっと横を向いたときなどにいっせいに三〇数名の視線が筆者に注がれたような気配を感じた。しかし彼らの方を向くとまた全員が目をそらしている。たまたま目があつた瞬間には、Aと同様に大きく顔を背けるようにして目をそらすとか、目を固く閉じてしまうという視線回避をする利用者が多くみられた。

ところで視線回避とはどういう現象であろうか。浜田(一九九二)は自閉症のメカニズムを相互主体性の問題としてとらえ、能動→受動の関係が成立しにくいことが自閉症の障害の中核にあるとした。さらに浜田(二〇〇三b)は、自閉症者が能動→受動関係の中でも特に受動の面に弱さをもっており、他者の主体性を自分の世界にうまく組み込むことができないのではないかと指摘している。「目が合う」ということについていえば、自分が相手を「見る」ことよりも相手から「見られる」ことに問題があることになる。そして相手から見られたときに、その視線の意図、意味を把握できずに混乱するものと思われる。普通は相手の視線の意図や意味が不明確であればそれを確かめようとしてかえって視線を向けるであろうが、彼らの場合には、相手の能動の中に意味のあるひとつの主体としてのまとまりを見いだすことができず、不安や恐怖が広がるものと思われる。相手の主体性の受けとめの問題は、視線の場合に限らずエピソード2にみられるように、相手の能動的な関わりに対して一般的な忌避としてあるのではないだろうか。

参与的な観察をするためには、系の内部に積極的に関わっていくことが必要ではあるが、以上の観点からすれば自閉症者の場合には関わり方に注意が必要だと思われる。訪問二回目以降は能動的な働きかけを控えて、こちらから話しかけたり視線を合わせたりしないようにし

て利用者からの働きかけを待つようにしてみた。

△エピソード3▽

訪問二回目、筆者が（ホ）にかけているとCが食堂ホールに入ってきて（二）にかけてがすぐ立ち去る。二、三分するとまた（二）に来てかけた。横から筆者の手元をじっと見ていたが、すっと手を伸ばしてきて筆者の持っていたメモ帳を取ってしばらく見ていたがまもなく返した。その後は、交渉なしでしばらく並んで座っていた。

△エピソード4▽

訪問二回目、Dが入浴を終えて食堂に来て、VII-3に座っている。こっちに気づいているのかどうか、顔をこちらに向けて椅子の上に横座りにしながらおとなしくほほえんで座っている。そばを通った時に緊張して身を固くするのが分かった。その後どこかに行つて、筆者が（二）に座っていると、玄関の方からいきなり近づいてきて筆者のズボンのファスナーのあたりを触り、さっと離れて遠ざかっていく。その後はさつきと同じVIII-3に座つて微笑んでいる。

△エピソード5▽

訪問二回目、音楽クラブの時、筆者が床に座っていると、Eが近くに来て筆者の周りを歩き回る。そのうちそばに来て、「○○さん（自分の名前）」と言って」と声をかけてくる。「○○さん」と名前を呼んでやると「はーい」と言つて遠ざかる。しばらくしてまた近づいてきて「○○○○さん（自分の名字）」と言って」という。「○○○○さん」と名字を呼んでやると「はーい」と言つて遠ざかる。

△エピソード6▽

Fが近づいてきて、「お父さんがむかえにくる」、「ローソンにお父

さんと行く」と話しかけてくる。「おにぎり」と、やきそばと、と・と」と指折りしながら言う。そのあと、筆者の左右の頬に両手の人差し指でそつとタッチして行く。

訪問二回目で何人かが筆者へ関わってくるようになってきた。その中にはエピソード3のように、筆者の持ち物に興味を示してそれに触るものや、エピソード2やエピソード4のBのように筆者の体に触るもの、またエピソード5のように言葉で話しかけてくるものの三つのタイプがあるように思えた。なかにはエピソード6のように言葉と身体タッチの両方のものもあった。その後の訪問日を通じて、いわゆる自閉的とされている利用者のなかで、何らかのかたちで自ら筆者に関わってきたものは三二人中一四人であった。自閉的と言われる割には、意外と社交的な人が多いという印象を受けた。自ら関わってこない利用者も、訪問回数を重ねるうちに視線回避も減ってきたり、こちらからの関わりに対して忌避的な態度は減じていった。

だいぶ慣れてきた感じがあるので、少し積極的な関わりをもってみようと考え、訪問六回目からヘッドの「手―目―耳」検査（山口一九八五）を行った。利用者に関わっていく場合に、こちらの接近の意図がつかみやすいように、何か分かりやすい課題を提示しながらの方がいいだろうと考えたからである。またこのテストは、試験者が自分の右手や左手で右目や左目、右耳や左耳を触つて被験者にその模倣をさせるといふものであるが、模倣遊び的な要素があると同時に自閉的な傾向を見ることができると都合がよい。

ちなみに、自閉症者の模倣はある特徴をもっている。浜田（二〇〇三b）によれば、模倣とは相手の身体の位置に自分の身体軸を重ねながら、相手のへするとおりにするVことである。そのようにして相手と同じ世界を生きようとするのが模倣なのだといふ。ところが、自閉症者は相手の身体に自分の身体軸を重ねることができず、模倣しよ

うとすると自分がへ見たとおりにするVという奇妙な模倣になるとい
う。自閉症者の中にはバイバイをするときに相手に手の甲を向けて振
る例があるが、それはこの原理に照らせば理解しやすい。そして
「手―目―耳」検査の場合には鏡映模倣になると予測されるが、実際
にテストの結果をみると、利用者のほとんどが鏡映模倣の傾向を強く
示した。

「手―目―耳」検査を実施したのは全部で一五人であった。そのう
ち七名は自ら関わってきた利用者であり、八名が関わってこなかった
利用者である。前者はやはりこのテストも受け入れやすかった。しか
し後者もテストというかたちであれば関わりをなんとか受け入れるこ
とができるという感じである。いずれにしても「真似してごらん」「同
じようにして」という要求に対して、利用者が仕草で答えるというか
たちのやりとりを通してコミュニケーションの道を開くことができる
という感触を得た。また利用者の中で筆者は「テストをする人」とい
う意味を与えられてある種の安定性を得たのではないだろうか。この
テストを受けた利用者は、その後筆者が声をかけると反射的に自分の
目を押さえたり耳をつかんだりする人が多くいた。また何人かはエピ
ソード7、8のように、筆者からの関わりを受け入れるようになった。

へエピソード7V

余暇活動でカラオケがあり、利用者が交代でマイクを握り歌を歌っ
ている。Aは(三)に筆者は(ホ)に並んでかけてそれを見ている。
テンポの速い曲になり、まわりの何人かがダンスを始めた。筆者は立
ち上がりまだ座っているAの手を取ってダンスに誘った。するとAは
すぐ意図を理解して立ち上がり、肩や腰に手を回しながらステップを
踏んで一緒にダンスを踊った。

へエピソード8V

Gが玄関ホール壁の壁にもたれて床に腰を下ろしている。隣に行つて
横に並んで腰を下ろすと、「せきこえのどに」という。筆者は続けて
「あさだあめ」と答える。すると「ピンポン」と返す。これはGがテ
レビのコマーシャルを遅延エコーリアとして繰り返しているフレーズ
であるが、他の利用者と掛け合いのようにして言うことがあり、その
時このようにフレーズを三つに分けたり「せき」「こえ」「のどに」「あ
さだあめ」「ピンポン」と五つに分けたりしてやりとりしているのを
何度か聞いたことがある。とつさにそれを思い出して、それを真似て
返した訳である。

ところで、エピソード5や8は、まさに彼らのコミュニケーション
の系の中に入ったと実感できるような体験であった。

自閉症の人に接したことのある人は、たいがい人間関係がうまくと
れない、あるいはコミュニケーションができないという体験をする。
そして、自閉症者は人間関係を作る能力に障害をもっているのではな
いかと結論を下すのが一般的などころであろう。DSM-IV(精神疾
患の分類と診断基準)でも対人的相互反応の障害が一番めの基準とし
て取り上げられている。しかしそれは、我々と自閉症者との間のコ
ミュニケーションや対人的相互反応の不可能性を、自閉症者ひとりの
精神病理に帰せようとする考え方であるといえよう。それに対して小澤
(一九八四)は、「自閉は人と人との関わりの中で生起する事態と
みるべきであり、(自閉症者の精神病理の)症状としてとらえるべき
ではない」という。つまり自閉とは、我々と自閉症者の関係の問題と
してみるべきだという。

小澤はこの主張の元になった体験について次のように書いています。
彼はある親の会が主催した会議に出席していた。その会議中にひとり
の子どもがせかせか動き回りながら、その部屋にある文字(壁に貼つ

てある習字、連絡番の文字など)を次々に声をあげて読んでいた。彼はその子に話しかけたが、その子は彼をほとんど意識していないかみえた。一ヶ月後に再度別の場所で会議がもたれた折、その子が急に彼のところにやってきてまわりをぐるぐる回りながら「マツモトゲンジロウ、マツモトゲンジロウ」と言いはじめた。お母さんは困って「この先生はオザワ先生よ」というのだが、その子は「マツモトゲンジロウ」を繰り返して、次第にいらつきだして、遂にパニックに陥りそうになった。その時、彼はその子どもを「自閉的」と感じたという。ところがその「マツモトゲンジロウ」というのが何か記憶に引っかかるものがあった、記憶をたぐっているうちに、前回の会議場の入り口に「火元責任者松本源治郎」と書いてあったのを思い出した。そこで入り口のところにいる子どもものところに行って「前の部屋にはここに松本源治郎と書いてあったね。あのときのことをおぼえていてくれたの。ありがとう」と言うと、その子の表情は穏やかになり、自分の席に戻っていった。そのとき、彼はその子から挨拶をされていたのだと感じ、その瞬間に「自閉的」という感じは消失したという。

自閉というのは、小澤がその子の挨拶の表現をそれとして受けとめることができずに戸惑い、ついには受け止めの努力を断念し、その子に対して心を閉ざしてしまうところに生じるのであり、さらには、その子が△自閉症▽であると診断しその子の行動を自閉症の症状と見ることよって、二人の関係のほころびをつくろうとところに生じるのではないか、と小澤はいう。つまり、一般的にいえば α が β をみて自閉的だと思うのは、 α が β に対して自閉するところに生じるということである。自閉というものを真に理解するためには自らの自閉の壁を破り、さらに自らの文化の枠組みを括弧に入れる必要があるのではないだろうか。

エピソード2~8は、こちらの出方次第では利用者からの働きかけがかなりあることを示している。そしてまた、利用者どうしの間にも

相互のコミュニケーションがかなり広くみられた。

△エピソード9▽

(イ)にH、(ロ)にIがいて会話をしている。HがIに向けて「トヨタ、トヨタ、トヨタ」というと、Iは「スカイライン」と答える。次にHが「ミツビシ、ミツビシ、ミツビシ」というとIは「ランサー」と答える。Hは「ランサーはミツビシではありません」と答える。一方が自動車メーカーの名前をいい、他方がメーカーに一致する車種の名前で答えるというゲームのようなやりとりだが、時にはIがわざと間違えて、それをHに指摘されて喜ぶ、といったヴァリエーションも加えて延々と続けている。

エピソード9は、言葉のやりとりとしてみればあまり意味のないものであるが、言葉以前の母子の間で交わされるクーイング *cooing* に似ていると感じ、はたで見てもほのほのとするものであった。だいぶん関わりが深まった頃には、筆者に対しても、エピソード5、6、8のように、これと同様の働きかけがあり、特にエピソード8では筆者も至福の感を持つことができた。このようなやりとりは他にも二、三組(いずれも男性どうし)の対でみられた。また利用者どうしは、その他さまざまやり方でコミュニケーションを交わしているので、いくつか拾い出してみよう。

△エピソード10▽

JがIV-1で新聞を読んでいるLに横から近づき、腰をかかめて顔をのぞきこんでいる。至近距離でしばらく見つめ合っている。たいへん不思議な光景。また別の日、JがII-1にいるLに近づいてゆき、じつと見つめ合っていたかと思うと、Lが立ち上がった。Jの左頬にキスをした。Jは何事もなかったかのように立ち去るとLも座る。たい

へんに不思議な光景であった。二人とも男性利用者である。

△エピソード11▽

Ⅶ―5にいるMがⅡ―五で椅子を傾けて前後にロッキングしているNを見ながら笑みを浮かべていたが、自分もロッキングを始める。MはNのロッキングに合わせてロッキングをしているようだ。Nはそれに気づいてMを振り返って見ながらロッキングを続ける。MとNは互いにじっと見つめ合っている。その後Mは立ち歩いてNの近くに寄るがすぐ遠ざかる。

△エピソード12▽

療育活動のプールが終わり、着替えた後みんなで通路にしゃがみこんで待っている。まったく静かでお互いにほとんどやりとりはない。そのうちIとOがなにかやりとりを始めた。IがOの右手を引っ張ると、Oはそれに応じて手を差し出す。するとIはOの手のひらを掻いてやる。その後、Iは左にしゃがんでいるOの左ほつぺを軽くつまんで引っ張っている。痛くはないようである。Oはされるままにしている。

このような利用者どうしの友好的なやりとりは、めぶき園での共同生活のなかで青年期以降に徐々に形成されてきたものと思われる。みずから自閉症者であるテンブル・グランディン(一九九七)によれば、自閉症者どうしには同じ波長があるという。それは彼女と草食動物との間にある波長とかなり共通するものもあるという。エピソード9(12は、めぶき園の利用者どうしの間にも彼ら独自の波長があることを示しているように思える。また彼女によれば、自閉症者は健常者が発達のごく初期に知らないうちに身につけてしまうソーシヤル・スキルを、長い時間をかけて積み上げて行かねばならないという。そのプ

ロセスは、健常者との関わり合いに依存する部分もあるであろうが、自閉症者どうしが独自の波長を重ね合いながら形成していく部分が重要なのではないだろうか。そのようにして形成された利用者どうしの友好的なやりとりは、彼らの生活を豊かにし、環境への適応を促進するうえで大きな役割をもつものと思われる。

観察の回数が増えていくにつれて、利用者の多くがかなり社交的であることが分かって意外な感を持ったのだが、これはめぶき園職員の親密な関わりによるところが大きいと思われる。日常的にハグをする、相撲をとる、くすぐる等、身体レベルでの関わりが頻繁に行われており、利用者もそれを期待して待ち受ける素振りがよくみられる。テンブル・グランディンは、身体接触の忌避があるが同時に身体圧迫への欲求も強くあり、打開策として油圧式の身体締め付け装置を自作して愛用しているという。その機械による圧迫から得ているのは喜びと安らぎだけでなく、他者への感覚であり、他者に対する情緒の世界を開くものだという(オリヴァー・サックス一九九七)。職員によるスキンシップは、締め付け期と同じ効果を持つという側面があるのではないだろうか。また、それは利用者どうしの友好的なやりとりを促進する効果もあると思われる。

自閉症者の文化を理解するために、彼らのコミュニケーションの系内部に入り、その系でなされているコミュニケーションの意味を了解しようという目的からすると、本研究が到達できたのは、その入り口にすぎないといえよう。筆者と利用者とのあいだ、利用者と職員とのあいだ、利用者どうしのあいだに、なんらかのコミュニケーションが可能であることは明らかである。しかし、そこでやりとりされるものはいったい何か、やりとりのかたちに一定のものがあるのかなど、未知の領域が広がっている。

他者を理解するということは、自己を理解することと同じだといえる。あるいは自己を理解することなくして他者を真に理解することは

できないともいえる。一見不可解な他者の行動も、自らの内にその行動原理を見いだすことで了解可能なものになる。村瀬（一九八一）がいうように、自閉症といえども人間の心的現象であるかぎりはわれわれの心的現象の変容の範囲にあるはずである。彼らのコミュニケーションの系の内部に位置しながら、彼らの心的現象をわれわれの心的現象の一変容として捉えることによって、この未知の領域は一步一步明らかにされるであろう。

引用文献

- 川瀬泰治 二〇〇〇 『自閉症児の自我形成 事例研究 別府大学紀要』
 五十嵐康郎 一九九八 『強度行動障害の発生機序と援助のあり方について』 平成一〇年度厚生省心身障害研究
 濱田寿美男、麻生武 二〇〇三 a 『からだとことばをつなぐもの』 ミネルヴァ書房
 書房
 山崎正二、市川浩（編）一九七〇 『現代哲学事典』 講談社現代新書
 小林隆児 二〇〇一 『自閉症と行動障害』 岩崎学術出版社
 麻生武 一九九二 『身ぶりからことばへ』 新曜社
 濱田寿美男 一九九二 『△私Vというものなりたち』 ミネルヴァ書房
 濱田寿美男、山上雅子 二〇〇三 b 『ひととひとをつなぐもの』 ミネルヴァ書房
 山口俊郎 一九八五 『ヘッドの手―目―耳検査』 坂本龍生、田川元康、竹田契一、松本治雄（編著）『障害児理解の方法 臨床観察と検査法』 学苑社
 小澤勲 一九八四 『自閉症とは何か』 精神医療委員会
 テンプル・グランディン、カニングハム久子（訳）一九九七 『自閉症の才能 開発』 学習研究社
 オリヴァー・サックス、高見幸郎他（訳）一九九二 『妻を帽子と間違えた男』 晶文社
 オリヴァー・サックス、吉田利子（訳）一九九七 『火星の人類学者』 早川書房
 村瀬学 一九八一 『初期心的現象の世界』 大和書房